

小説 新幹線殺傷事件

盛丘 由樹年

新幹線で、中村耕太郎さん（38）が首などを切られて死亡した。6月9日午後9時40分、12号車で中村さんは騒ぎに気づいて止めに入り、斉藤一郎容疑者（22）と車両中央付近でもみ合いになった。中村さんは転倒したが、立ち上がり、止めようとした。右足にはナイフが刺さっていた。その間に乗務員が他の乗客を別の車両に誘導した。斉藤は仰向けになった中村さんに馬乗りになり、なたで切りつけ続けた。

斉藤一郎は警察に逮捕され、「むしゃくしゃしていた。誰でもよかった」と供述。昨年12月に家出して自転車で長野県へ移動。数カ月間、県内の公園などで野宿していたとみられる。

中学2年のとき不登校。両親との折り合いも悪くなり、県内の生活困窮者の支援施設で約5年間暮らした。定時制高校3年、職業訓練1年、機会修理会社に就職したが、人間関係を理由に退職。2016年4月ごろから、岡崎市で祖母（82）と同居。祖母は「2階の部屋に引きこもり、パソコンでインターネットをすることが多かった」「おとなしく静かな子だった。自分を否定することが多く、人間関係に悩んでいた」と語った。

0. 新幹線のぞみで刃物を振り回した男

斉藤一郎には協調性がないようにみえる。反発心も強い。他人からみると、「なまいきなヤツ」にみえるだろう。ただし、感受性が強く、傷つきやすい心を持つていたと私は推測する。学校でも、職場でもいじめられやすいタイプだったと思われる。でも、それが本人のせいだとは言えない。

彼は自分の怒りの感情が押さえられないタイプの人にみえる。心の中に逆鱗を持っていた。誰でも、大なり小なりのそれを持つているのだが……。

逮捕時の供述で「社会をうらんでいた」というだけでは、恨む対象が大雑把であり、抽象的だ。一つのことに絞れないほど、多くのことで不満をもっていたことになる。人間関係がうまくいかなかったことが根底にあるようだ。彼には発達障害があったと言われているけれど、それなら周囲がそれに合った対応をするべきだった。彼を取り巻く社会に理解ややさしさが不十分だったと私にはみえる。

家庭で、中学校で、職場で、そして放浪先の地域で、

彼には人々に受け入れられず、疎外感を味わっていたことがいくつかの情報から推測できる。

1. 両親との確執

母親がマスメディアに聞かれ、「あの子は発達障害で、育てにくい子でした」と答えた。「自殺願望があった」とも語った。

父親はストーブのエピソードを話した。「小さいころ、ストーブに触ればやけどするから、近づくなといったのに、近づこうとする。言っても聞かないから、しまいにはぶん殴った。オレはアイツに恨まれたらうよ」

また、その中学のとき、遠足のための水筒で、母親が姉に新品のものを渡して一郎にお下りの古い水筒を渡すと、彼はその不平等をうらんだ。その夜、両親の寝込みを襲い、刃物を投げつけたりして警察沙汰を起こした。

両親は息子に手を焼き、どうしようもなく、とうとう実家での養育を断念した。

2. 不登校

斉藤一郎は、中学二年のとき、いじめにあい、不登

校になった。かなり陰湿ないじめだったようだ。家庭では厳格な親父に「学校へ聞け！」と怒鳴られ、学校に行けば、いじめにあうから、板ばさみにあっていたわけだろう。

いじめはそうとうに悪質だったのだろう。グループに囲まれ、「おごれよ！」とたかられる。おごる金もなくなると、クツや運動着がなくなった。傘もなくなり、ずぶぬれになって裸足で家に帰ったことになる。先生に訴えると、「告げ口したな！」と、いじめグループは逆恨みし、いじめをエスカレートさせる。先生たちは見て見ぬふりをし、教育委員会にも報告しなかったようだ。例によって「本学校にいじめはない」と言い張っていたのだろう。

引きこもりになってから、結局、施設に入れられた。定時制高校に通うようになった。あの悪魔のようないじめグループはいなかったから、この定時制高校では、のびのびとすごしたようだ。一般に4年かかるところ、3年で卒業できたから、かなり優秀な（トップクラスの）生徒だった。当時の教官なども彼を高く評価していたという。1年間の職業訓練でも、難なくこなした。それなりの資格も取った。

3. 就職

埼玉の機会修理会社に就職した。当初は物覚えのよい、優秀な社員だったとされる。しかし、転勤させられた。転勤の理由は不明だが、彼に合わない何かがあった可能性がある。愛媛工場に転勤された後に、その社内ではじめにあつたことが関係者に証言されている。彼にとつて意地の悪い先輩や上長がそろつていた、と私は考えている。例えば――

小さなミスをしても、「何やってんだ!」と怒鳴られた。「こんなことができないのか、製品にならん、やり直した。この未熟者が」

あるとき、職業訓練校で習つたやり方でやつてみると、隣で見っていた先輩が、怒鳴つた、「無駄なことをやつてるんじゃないか」

「しかし、これは学校で習つたことで……」

「そんなもん、ここでは通用せん。そんなことに手をかけるな。手抜きするところはしっかり手を抜け!」

自分なりに工夫して、よかれと思つたことが、上長に完全に否定された。罵倒された。それを無視して再び試みると、胸倉をつかまれ、壁に押し当てられた。今にも殴りかかつてきそうな勢いで怒鳴りまくられた。

「テメー、また勝手なことをしやがって。オレの言うことが聞けんのか!」

「しかし……」

「しかし、へつたくれもねえ。ここではここの流儀でやるんだ!」

半年後、正社員にもなれたから、それでも彼なりに辛抱した。仕事をすることに矜持があつたが、吹き飛ばされた。職場での打ち合わせでも、高圧的な態度をとりたがる者ばかり、ムキになつて自分が言い出した意見を押し通そうとする先輩たち……。

10カ月後、我慢できなくなり、失望感に落ち込みながら、退社した。ほかに就職する気にもなれなかつた。また新人からスタートして、鬼のような先輩連中に罵倒されながら働くことはできそうもなかつた。「わずかな給料のために、オレは、こんなことをし続けなければいけないのか、もう耐えがたい」――

4. 放浪の旅で

一郎は退職後、いさかいの絶えなかつた実父の家に戻れなかつた。2016年4月ごろ、岡崎市で叔父(57)と祖母(82)の住む家に、預けられるように移動した。のちに祖母の養子になった。祖母のやさし

さだけが一郎を支えていた。

それでも引きこもりがちだった。就職しようともせず、2階でパソコンに向かっていることが多かった。

ある日、叔父が一朝に話しかけた。「一郎くんは、今後、どうしたいんだね？」

しばらく間をおいてから「自分は価値のない人間だ。自由に生きたい。それが許されなければ、死にたい」と答えた。

叔父は啞然として、二の句が継げなかった。

ネットの世界に飽きて、時たま家を出て放浪の旅をすることがあった。最初は警察に保護されたりした。

心配した祖母が捜索願を出していた。

公園で寝袋に包まり、寝ていると、顔のあたりに強い光が当てられた。

「おまえ、ここで何しているんだ？」

「何って、寝ているだけです。寝ていてはいけないんですか？」むっとしながら、くっつかかるように言い返した。彼らは見回りの警察官たちであることは、彼らの身なりでわかった。二人一組で、一人が話しかけてくるが、もう一人はやや後ろに下がった位置から、そのやり取りを傍観していた。

そんな彼の質問には、まったく答えず、続けて「どこから来た？」と聞いてきた。「岡崎から」と答えた。二、三の質問ではすまなかった。次々に詰問してきた。

「年齢は？」「名前は？」「職業は？」「住所は？」「身分を証明するものを持っているか？」

一郎を当惑させる質問が続いた。彼は、自分が不審者と疑われていることに気づいた。「確かに、オレはどこからみても不審者だろうよ」と卑屈になった。「何なら、不審者であることを証明してみせようか」と、頭の片隅で茶化した。しかし、へたに対応すれば、任意同行という名のもとで警察署に連行されてしまうことは知っていた。

荷物の中まで調べたすえ、最後に、警官は「今夜はここでいいから、明日はどこかへ行ってくれ」と、汚いものでも見る眼で言い放った。やっと開放されたが、眠っているところを起こされ、人をドロボー扱いしてあれこれ尋問し、荷物の中まで調べたすえに、何も出なかったから立ち去った警官たちに憤った。そのむかむかした気分はいつまでも消えなかった。

お金を節約するため、公園や道の駅の広大な駐車場の片隅で寝ていると、住民たちに邪険にされた。子供たちには石を投げられた。にらみつけ、怒ってみせる

と、警察に通報されたことが何度かあった。

どこにも居場所がなかった。気候の冷たさよりも、世間の風の冷たさがずっと身にしみた。おもてなしの国とはどこの国のことか、と幻滅の感情が渦巻いてきた。

今年1月から、6カ月に渡る放浪の旅に出た。祖母からいつものようにいくばくかの旅費をもらったが、行き先を告げなかった。そんな行き先など定めていなかった。いや、一カ所だけ訪ねてみたい町があった。高校クラスメートの女子の一人が引越した先だった。その後、連絡が取れなかった。

半年に渡る長期の旅をしても、彼が落ち着けるようなところは、どこにもなかった。

目に映るものは、そろそろしく雑多なものばかり。よく見ると、汚れている。ゴミがそこら中に落ちていて。街を流れる川はみんな濁っている。「これが美しい国か？」

道路を歩いていると、車の音が騒々しい。うしろから「どけどけ」と言わんばかりに走り去る。鳥たちは鳴き騒ぐ。空から冷たい雨が降り、雪も降ってくる。自然も決してやさしくない。

気がつくくと、自分の体が埃にまみれ、臭ってきた。

孤独感と空腹と疲労がたまる中で、突き動かされるように怒りが渦巻いてきた。「くそつ、どこへ行つても同じだ」

旅先で、一郎は一人の女性に片思いをした。それまで何人かの女性に近づこうとはしたが、ぜんぜん相手にされなかった。今回は惨めすぎる体験だったと推測されが、心に秘めたことのため、詳しい状況の供述は得られていない。屈辱的な扱いを受けて憤り、恨みとなって一郎の心に火がついた。

こんな弱小存在の自分でも、できることは何だろうか、と自問してみる。

〈ナイフを振り回すことぐらいなら、オレにもできるぞ〉……〈そうだ、やつらに仕返ししよう。虚栄の社会にうごめくやつらだ。傲慢で、自分勝手に、意地が悪い。オレを避けて通るようなやつらに、痛烈な一撃を加えてやる！〉

一郎の怒りは、失恋相手には向かわなかった。若い女性全般に向けられた。若い女性たちを標的とした。

〈実行の舞台として飛行機の中が一番効果的だろうが、ナイフを機内に持ち込むのは無理だろう。搭乗手続きでハサミでさえ取り上げられるというからね。それなら……〉

自暴自棄的な行為に走りはじめた。

5・新幹線で

一郎は2018年6月9日の夜、東京発新幹線のぞみに乗り込んだ。東京から名古屋までノンストップで走る。座席は、ほぼ満席だった。たまたま隣の席に座った女性とは、最初から無言だった。座るときに目が合っても、会釈さえなかった。明らかによそよそしい。〈女たちはオレのような者にハナもひっかけないんだろうね〉

新横浜駅を通り過ぎ、窓の外に海が黒く遠望できるあたりで、男はナイフとナタをリュックから取り出し、やおら立ち上がると、隣に座っていた女性に切りつけた。彼女が逃げ去ると、通路を隔てて座っていた女性にも切りつけた。彼女も何やら叫びながら、すぐに後ろの車両13号車のほうに逃げて行った。彼女らは軽症で済んでいた。

そのあとを追いかけようとすると、後ろの列の座席に座っていた男が立ちふさがった。

「おい、止める！」と、長身の男が見下ろすように言っつて、体をぶつけるように押してきた。男は中村耕太郎さんだった。大手化学メーカーの中堅社員で、横浜

での研修を終え、勤務先の大阪に戻る途中だった。温厚で明るい性格で、将来が囑望されていた人物だった。剣道の心得もあったといわれているが……。

〈邪魔する気か？ オレのしたいようにさせろ！〉と心の中で叫ぶ。怒りをこめて男の腹にナイフを突き刺したつもりだったが、彼は長身だったから、その太ももに刺さった。長身の男はよろけて、いったんは転倒したけれど、また立ち上がって、「止めるんだ！」と言いながら手で押した。一郎は車両の中央付近まで押されたが、刃渡り30センチのナタに持ち替え、中村さんの首筋あたりに振り下ろした。それが致命傷になった。中村さんは腰が碎けるように倒れこんだ。一郎は仰向けになって横たわった中村さんに馬乗りになり、さらに切りつけた。執拗に攻撃した。動かなくなるまで……。数十カ所の傷を負わせた。

一郎はもうピクリとも動かない男に馬乗りになったまま、呆然とした。12号車には他にももう誰もいなかった。〈オレは誰を攻撃すればいいんだ？ この男でよかったのだろうか〉

まもなく列車が小田原駅に止まった。緊急臨時停車だった。警察の者たちらしい一団が盾を構えながら、一郎に迫ってきた。

了